



JCOMM 通信

日本モビリティマネジメント会議
ニューズレター

Vol.17 ● 2010.9.30

【発行】 JCOMM実行委員会
ニューズレター編集部
【お問合せ】 京都大学 藤井研
筑波大学 都市交通研
mail: info@jcomm.or.jp

MMIに関連する会告掲載希望やご意見等、
随時受け付けております。

日中の日差しも、すっかり柔らかくなり、秋の気配が次第に濃くなつてまいりました。今号は、先日、広島県福山にて開催された第五回 JCOMMの報告を中心にお届けします。

イベント報告

第五回JCOMM報告

去る七月三十日、三十一日の両日、広島県福山市まなびの館ローズコムにて、第五回日本モビリティ・マネジメント会議が開催されました。初めての地方都市での開催となる今回も、約309名の方に御参加いただき、口頭発表十八編、ポスター発



▲ 写真1 まなびの館ローズコム

表五十四編と盛況のうちに終了しました。当日は好晴に恵まれ、車の浦などへの観光を、お楽しみ頂いた方もいらつしやうと思います。ご参加いただいた皆様、また準備にご協力いただいた事務局の方々に厚くお礼申し上げます。

【会議概要】

会議の前のプレイベントでは、開催地である福山市におけるMMの取り組みが紹介され、「地域との連携によるMMの定着」について、パネルディスカッションが行われました。続くオープニングセッションでは、二編の講演と平成二十二年度 JCOMM賞の授賞式が行われま



▲ 写真2 口頭セッションの様子



▲ 写真3 ポスター発表の様子

した。第一日目のポスターセッション A・B、口頭発表(MMの戦略的展開)を終えた後の懇親会では、シエフが目の前で作る各種料理を食しつつ、様々な意見交換が展開されました。二日目も「職場MM」「中心市街地活性化」「MM教育」「地域公共交通の活性化」「MMにおける多様な可能性」に関する口頭発表セッションに加え、ポスターセッション、ツール展示セッションなど多彩なプログラムで構成され、MMに関する様々な議論が交わされました。

発表に用いられた資料は、近日中に JCOMMHPにて公開いたします。是非ご活用ください。

【参加者アンケートから】

参加者アンケート(回答者数:109)によると、昨年に引き続き、今回も口頭発表の各セッションが、大変高い人気であることが示されました。また、ポスター発表に関しても、八割以上の方に「有意義であった」と

ご回答いただきました。今年のお頭発表セッションは、例年要望の多いテーマに加え、「MMの戦略的展開」といった新たなテーマも設けられ、持続的な展開に向けた議論ができたことが特徴的であったものと思われます。

また、興味のあるMMのテーマに関しては、図1のように交通まちづくりを筆頭に、職場・組織、学校、居住者を対象としたMMに高い関心が寄せられていることが示されました。

第五回JCOMMアンケート

自由記述欄より

・他学会の動きからヒントを得るような取り組みが必要と考える。例えばMM教育の可能性を広げるには教育工学の知見があるとより良いのではないか(他学会との共催か)

・開催地で取り組んでいることに実際参加者が体験できるようにする(バスに乗る、アンケートをとる、行政・団体との意見交換等)

・大変有意義な会であり、非常に勉強になりました。私はバス事業者として参加させて頂いておりますが、参加者の中に事業者が少なく、当事者としてもっと積極的に参加するべきではないかと感じております。

・小学生や大学生が頑張っている。官学協働は重要なポイントになってくると思う。



さて、第六回JCOMMは、宮城県仙台市での開催を予定しております。参加者の皆さまからの貴重なご意見を参考に、よりよい運営に努めてまいりたいと思っております。今後ともどうぞよろしく願います。

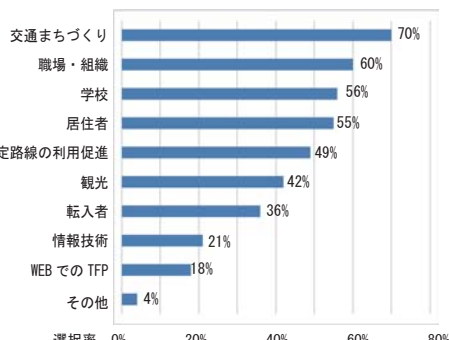


図1 興味のあるMMのテーマ (複数回答)



▲ 写真4 JCOMM賞授賞式の様子

ニッポンのMM
第十四回
モビリティ・
マネジメント教育

今回はモビリティ・マネジメントを
展開していくにあたって重要な柱の
一つである小学校を対象にした事
例をご紹介します。これまで学校
M M、交通環境学習などいろいろ
な呼ばれ方をしてきましたが、「モ
ビリティ・マネジメント教育」という
名称で広めていくことになりました
。これまで教育学的な裏付けが
不十分でしたが、教育学の専門家
の方々と一緒にM M教育の定義や
それによって育成される力を議論
し、位置づけを明確にいたしまし

た。詳しくは、交通エコロジーモビリ
ティ財団のホームページからダウン
ロードできるリーフレット「モビリテ
ィ・マネジメント教育のすすめ」を
一覧下さい。
http://www.ecomo.or.jp/environment/study/data/mm_catalogue.pdf

これまでのM M教育のよい事例と
して、京都府久御山町の小学校の
取り組みがあげられます。町内の
全小学校(3校)で、小学校の二
ズに合わせて平成17年度以降、
M M教育を実践しています。東角
小学校では2年生の生活科でコミ
ニティバスの体験乗車と絵本「ピン
ポン・バス」を組み合わせた授業を、
佐山小学校と御牧小学校では5

年生の総合的な学習の時間に環境
や福祉の観点から体験乗車や交
通すごろくを実施しています。平
成20年版学習指導要領に基づ
く新教育課程が本格的にスタート
する格好の時期ですので、これを
機会によりM M教育の取り組みが
全国に広がっていくことを期待して
います。



▲ 写真 コミュニティバスの運転手さんにインタビューする児童

(大阪大学 松村暢彦)

JCOMM法人会員紹介
Vol.3 株式会社 地域未来研究所

当研究所では、交通、環境、まち
づくりなど、地域社会に係る様々
な分野のコンサルティングを行って
います。その際、交通問題に対し
ては、緊急的な対策のみならず、本
質的な解決策としてM Mを積極的
に提案し、多くの地域で取り組ん
でいます。その一例として広島県大
竹市での事例を紹介します。

大竹市では、平成21年10月に市
街地を運行する幹線バスを導入し

ました。当研究所は計画段階から
事業に参画し、ツール配布やマップ
作成等、多様なM Mの提案・支援
を行っています。その中でも、市民
によるバス導入・運営に係る検討
会の設置、また検討結果等の市広
報誌への掲載は、大きな成果を挙
げました。事務局や検討会メンバ
ーは大変ですが、協議を重ねるに
つれ、メンバーの協力量識が高ま
り、一般市民のバスの応援も増え
その結果として、利用者数は増加
傾向にあります。

市民主導の取り組み等が評価さ
れ、事業を担う協議会が「平成22
年地域公共交通活性化・再生優良
団体大臣表彰」を受賞されまし
た。当研究所も、事業を通じて多
くを学ばせて頂きました。今後の
地域づくりに活かす所存です。



▲ 図 幹線バスのイラスト

このコーナーでは、職場M M
に関する最新情報について3回
に渡って紹介します。第1回は
「職場M Mに関する国全体の取組
み」として、米国と日本の取組
みを紹介いたします。

米国での取組み

米国では、交通省(DOT)と米
環境保護庁(EPA)が中心となり
Best Workplaces for Commuters
(BWC)という国家的な通勤交
通対策を実施しています。

自動車通勤の抑制に資する
企業や学校等の自発的な取
組みを促進する取り組みで、
360万人以上の従業員が
参加しています。BWCでは、
実施企業への税制優遇、取
組み内容に応じたランキン
グの公表、交通コーディネー
タの活動に対する表彰など
が行われ、2006年の時
点で、年間CO2は188万トン、
約680億円のガソリンが節約
されたと報告されています。

日本での取組み

日本では、通勤グリーン化プ
ログラムとして「Ecoによるエコ
通勤」の国民運動を展開してい
ます。平成20〜21年度には
全国約900事業所、約5.8

職場MMの取組みについて
第1回：職場MMIに関する国全体の取組み

万人を対象としたワンショットEco
が実施され、自動車通勤による年
間CO2が全体で約1割削減したこ
とが確認されました。また、エコ
通勤を支援する仕組みとして、平
成21年度に「エコ通勤優良事業
所認証制度」が創設されました。
この制度は、エコ通勤を積極的に
推進する事業所や自治体を優良事
業所として認証・登録し、その取
組み事例を広めることで、エコ通
勤の普及・促進を図るもので
す。認証の有効期間は2年で、
1年毎に取組み状況の報告を
行い、報告されたCO2削減量
は京都議定書目標達成計画の
実施報告に算入される仕組み
になっています。現在議論さ
れている交通基本法において
は、交通体系・まちづくり・
乗り物の三位一体の低炭素化
の推進に向けた重要施策とし
ても位置付けられています。

(協力) 計量計画研究所



BEST
Workplaces
for CommutersSM

▲ 図 ロゴマーク(右:米国BWC、
左:エコ通勤優良事業所認証制度)